



Title	関根秀雄著 『モンテニュー逍遙』
Author(s)	引田, 稔
Citation	経営と経済, 60(3), pp.165-172; 1980
Issue Date	1980-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/33868
Right	

This document is downloaded at: 2019-09-17T00:40:57Z

《書評》

関根秀雄著『モンテーニュ逍遙』

引 田 稔

関根秀雄氏が『モンテーニュ随想録』全3巻の初訳を世に送ったのは、1935年である。この時期は日本にとっては戦前であり、やがて太平洋戦争への突入と敗戦と戦後と、そして戦後から現在へと、この長い波瀾に満ちた時代に関根氏は、文字通りモンテーニュとともに生きてきた。本書『モンテーニュ逍遙』の題名が示すように、本書の内容は特定のテーマを中心として一つの結論を打ち出すための論文ではない。それはモンテーニュと『随想録』とをめぐっての著者関根秀雄氏の永い研究生活の総決算としての確信と感慨とを併せて展開した覚え書というように受け取ることができる。著者は新しい角度、視点として、本書の副題が示すように、「一東洋人として」の立場から、モンテーニュを東洋の哲学、文学と対比すること、特に老荘の思想や徒然草などを引用して行なうことを試みた。そして、改めてモンテーニュの根本思想となっている自然随順の生き方、考え方が、いかに真実な共通点によって結ばれているかを語っている。著者関根秀雄氏をふくめて、実に多くの研究者がモンテーニュについて語り、『随想録』が何を語っているかを語っている。従って今日では、もはやモンテーニュについて新しく語ることはあまり残されていないようにさえ見える。だがそれはモンテーニュの重要性が無くなったということでは全くない。今日もまたわれわれは大いに心を澄ましてモンテーニュが語るところに耳を傾ける必要があるだろう。

モンテーニュの『随想録』の初版が刊行されたのは1580年であった。ことしはその400周年に当たる。「書評」としてではあるが、著者関根秀雄氏とともに、本書を通じてモンテーニュと『随想録』とについて語ることは特に次の意味において、われわれにとっては重要である。すなわち、われわれは今

日モンテーニュを無視してフランスおよびフランス人について正しく語ることができないということが一つの理由であり、もう一つの理由は、いま世界が第二次大戦後の長い平和の歴史を与えられているようにみえるが、別な見方からすると、更に怖るべき全地球的な破局の前に立たされていると危惧する声も聞こえるからである。モンテーニュの時代は Saint-Barthélemy の大虐殺 (1572) が象徴するような新旧キリスト教徒の激突する騒乱と革命の時代であり、伝染病、天変地異の時代であった。このような異常な時期に際会して、最も重要なことは、われわれはあくまでも平常心を失ってはならないということであろう。そのことを最もよく教えるものとして、われわれはモンテーニュの名と『随想録』とを忘れてはならないのである。恐らく、本書の著者関根秀雄氏もまた、かつて関根氏自身が訳出している Sainte-Beuve の『月曜閑談』の中のモンテーニュについての一節を、胸に思い浮かべているに相違ない。すなわち——「暴風雨の日が来た。勃発した。恐らくこれからも勃発するだろう。このあらしの日を突きぬけることを学ぼうではないか……われらの判断の中にいささか明晰と節度とをとりもどすために、毎晩モンテーニュを1ページずつよみなおそうではないか。」

モンテーニュが自らに課した根本的な命題—《いかに生きるべきか》—について、『随想録』全3巻がその思索、検証の道程を、すなわちモンテーニュその人の生きざまを展開したものであったとするならば、本書『モンテーニュ逍遥』は、モンテーニュに就き従って最後まで離れることのなかった関根秀雄氏の情熱を傾けた軌跡の回顧であり、このとき初めてモンテーニュを離れて自己自らの真情を吐露した決定的な証言であると言うことができよう。本書の価値がここに発見される。われわれはここに改めて、著者関根秀雄氏の証言によって、いかにモンテーニュが《真実》であったかを思い知らされるのである。モンテーニュはその『随想録』によって、文学史上の大家であり、同時に偉大なモラリストであった。その言葉がいかに真実であったかをわれわれは今改めて関根秀雄氏の証言によって理解することが可能である。『逍遥』という本書の題名に導かれて、われわれもまた著者関根秀雄氏とともに、関根氏を通してモンテーニュを、またモンテーニュを通して関

根秀雄氏を尋ねてみたい。

モンテーニュは「詩人」とであると著者は言う。「詩人」と言うことばが、稚拙な誤解を生むおそれはあり得ないが、「詩人」と規定することに、著者は深い確信をもっている。「モンテーニュの根本思想も、エッセー各個の構造も、その文体も、モンテーニュの詩人的特質と切り離しては、全く考えられないように思う」と述べている。それはモンテーニュの、『随想録』の思想の展開（あるいは「転回」とさえ言う）における飛躍が、文体として〈詩人的〉であるという意味であるが、著者が総括するこのような定義の中には、著者自身のモンテーニュ的人生論の体験としての悟りがにじみ出ている。人はいかに生きるべきかという永遠の問いに対して、モンテーニュは「哲学するとはいかに死すべきかを学ぶことである」と一つの章を書き起しているが、敢て死に直面することから生の意義をたしかめて行くそれらの言葉を、著者関根氏は自らの力として同化を遂げる。「モンテーニュは詩人であるという認識こそ、モンテーニュの生涯と著作とに関するもろもろの問題を解決するいわばマスター・キーであろう」と重ねている表現は、ほとんど本書の結論のように受け取ることができる。モンテーニュにおいては、哲学もまた詩なのである。その生き方自体もまた詩人なのである。ここにモンテーニュにおける作家とモラリストとのユニークな一体化がある。そして『随想録』の中に分析することができるそのモラリスト的要素は、困難ではあるが整理し整頓し定義して解説することはできる。しかし『随想録』における〈詩的〉な文学性については、説明を与えることはかならずしも単純、容易ではない。説明し難い文学的效果の中では、読者は、ふつう、まず感動にひたるにすぎないからである。モンテーニュの語りかける折々の言葉は、そのように内容や題材の多様な変化の中でわれわれに感動を与える。その感動の実体ともいうべきものは言葉では捉え難いものが多い。それは人がなんら変哲もない自然そのものの姿の前で、人の姿を反省し、陥る深い味わいに似ている。故に『随想録』の中で最も重要な文学的效果については、その思想的、哲学的評価のように具体的に、明確に規定することはむしろかしい。著者もまた、自己をありのままに語るほかは自分の文体をもつことのなかった

モンテーニュについて、その作品と作家との真髄を「詩人」であると結論する以外に適切な表現を発見することができなかつた。それで十分であろう。モンテーニュが『随想録』を書くに至った動機はモンテーニュ自身によって『随想録』の中に明らかにされている。しかし、やがてその『随想録』がモンテーニュ自身を形づくって行く。モンテーニュが『随想録』を作ったということよりも、『随想録』がモンテーニュを作ったということの方が真実かもしれない。それは、『随想録』が徹頭徹尾借りもののないモンテーニュ自身であるということといささかも矛盾するものではない。モンテーニュを読む愉しきは、いつの間にかモンテーニュと膝を交えての談話の席に誘い込まれて行くたのしさであり、真の魅力の秘密はそのあたりにある。文体が詩人的であるということは、飛躍における興趣がつきず、全編にみなぎる痛快（多少は粗野であるということになるのであるが）な比喻に対する形容である。われわれは喜んでそのような指摘を受け容れることができる。

モンテーニュ研究の多くは、モンテーニュのとりとめのないおしゃべりの中に、一貫した中心的思想を体系として捉えることに没頭した。しかしモンテーニュにおいて最も重要なことが、その思想体系ではなく、体系を全く無視した奔放自由な表現そのものであることを、そしてその姿がいかに大切なものであるかを著者はもう一度声を大にして語ってみたいと思う。人生とはまとめようがないものなのである。まとめることに意識的に反撥して抵抗したのが作家、思想家としてのモンテーニュの特徴であった。無論、本人自身は作家あるいは思想家などと呼ばれること自体を許さない。しかしそれは本人には関係のないことである。だから、モンテーニュについて正しく語るためには、モンテーニュの体系を規定しようとしてまとめるのではなく、モンテーニュを「詩人」と定義し、その詩人に訪れた折々の感想、すなわち試論とも随想ともいふべき〈談話〉そのものの一つ一つについて、おもしろさを語ることが『随想録』に対しての最も正統な評価というべきものになるだろう。しかし、それはまさにとめどもないことになりそうである。誰もそのような作業に手を貸そうとはしない。『随想録』そのものの読書をすすめるのが最良の道である。そこで、モンテーニュについて語るということは、常に

その最も肝心な部分が見落されることになる。そして、モンテーニュ自身が笑うように、「注解のいたちごっこ」が始まる。本書『モンテーニュ道遙』において、このようなモンテーニュについての本来のおもしろさの部分、詩人あるいは文学性についての著者関根秀雄氏のいっそう積極的な、いっそう率直な〈感動〉を評価の形で指摘されていた方が望ましかったと思う。いわゆる名文、名句となって評価の定まっているモンテーニュの章節、警句、金言は多い。しかし『随想録』全3巻をおそらく誰よりも最もよく読み、最も親しんだ著者関根秀雄氏の胸に、最も深く影を落したモンテーニュの言葉、章句は何であったか。しかし、それを洩らしてほしいと希うことは多少無遠慮に過ぎるかもしれない。われわれはモンテーニュにだけならば、自分の心の底を打ち明けてみてもよいと思うほどの親近感をいく度となく『随想録』の中で覚える。しかし、これとは別に著者がモンテーニュとの初めての出会いを書き止めている本書の初めの部分は、われわれの心に静かな感動を呼び起さずにはおかない。この「書評」では、モンテーニュ自身のことよりも、より多くを『道遙』の著者関根秀雄氏について語らねばならないのであるが、著者が「この著述の中で言いたいこと」、それは「自分の一生を幸福のうちに生き抜く術を体得するために読む本、それが『随想録』である」ということである。この言葉の中で、われわれは「自分の一生を」とあるのを、「一つの時代が」と直ちに置き換えて理解する必要がある。『モンテーニュ道遙』の執筆の動機とその意義については以上の如くであるが、本書の副題として加えられている「一東洋人のモンテーニュ論」について更に触れてみよう。「道遙」とは、モンテーニュ自身が『随想録』の中で触れている逍遥学派、更に荘子からの言葉として取り上げているものである。それはいわゆる老荘思想とモンテーニュとの対比という試みに立っているが、著者の最初の意図が十分に論証されたか否かは、著者自らが巻末において認めているように、むしろ問題の提起にとどまらざるを得なかった。つまり、問題は今後に多くを残す結果になるのであるが、ただ一つ、いっそう明らかに解明されたと見るべきことは、東洋哲学の普遍的な根底を形成する「自然」の概念と、あくまでも人間的な温か味から離れることのなかったモンテーニ

ユの、西欧的な意識の中における「自然」に対する心情との間の隔たりであろう。そしてこのような比較の試みを通じて、著者は疑いもなく更に深くモンテーニュの心中の秘密に近づくことができた。最後まで尽きることのないモンテーニュをめぐる逍遥において、夢想は更に重厚な現実的感覚に向って前進している。著者関根秀雄氏はモンテーニュを生きているということができる。

モンテーニュは『随想録』第1巻から全3巻の書入れに至る最後まで、一貫して不変にモンテーニュ自身であった。ということは、ある時期にストア的で、ある時期にセプティックであったということではないということである。しかしモンテーニュの懐疑主義は《que sais-je?》のことばとともにモンテーニュに対して下される根本的な一つの評価である以上、著者は繰り返しかえしこの点に触れないわけにはいかない。要するにモンテーニュの scepticisme は、自分自身であろうと、また他のものであろうとも、一切の独断を排するという方法的信条であり、いかなるドグマも持ちたくないという信念の宣言であり、それは「彼にとっては思想の方法であると共に生活の方法なのである。」そこから、たとえ自家撞着が結果として生じても、モンテーニュは意に介しない。故にモンテーニュは限りなく揺れ動く。だが、いつの瞬間にも、自己の全存在を堵げて自己が真であると信ずるところに従う。とすることによって、誰の眼にも心変わり、気移り、変化として映っても、それは彼にとってこだわるものにはならない。だから『随想録』を分析して、モンテーニュの思想的な進化を証明したり、決定することはできないと著者は言う。モンテーニュは自らが述べたところのものを古典と対比する。しかし、古典から影響を受けた形では何一つ論述していないことを語っている。故にモンテーニュの言葉についてその〈源泉〉を探り出すという方法は、方法的にはあべこべである。しかしモンテーニュの人生観や思索に道標としての〈源泉〉が無かったわけではなく、それは著者関根秀雄氏はモンテーニュの書斎の天井に刻まれた57の格言であろうと言う。仮りにモンテーニュが東洋思想（日本をもふくめて）との比較において、たとえば荘子との深い一致がみられたとしても、両者の符合は偶然でよい。それによってモン

テーニュのユニークな文学的な特徴が影を失うことはない。中国の思想家とヨーロッパのモラリストとが、人間の根本的な死生観や対自然観においていくつかの一致点を見出したとしても、つまり哲学において共通点を見つけたとしても、人生そのものの色彩においては互に包摂されることのない特色があり、個性があり、そこに本質的な人間としての意味があるからである。

モンテーニュはキリスト教徒であったのだろうか。モンテーニュ自身はカトリック教徒らしく生きたと語っている。しかし今日の人の眼にはキリスト教徒とはみえない、と著者は言う。血で血を洗う新旧両教徒の争いの時代において、祈りは神に対してよりも、自然そのものに対して向けられるのが自然であったかもしれない。そして、「モンテーニュは、年と共に平凡普通の人間生活に徹底し、日常茶飯事の無意味と思われる瑣事を興味深げに眺め、存在の意味を捉えている」と著者は記しているのであるが、そこには著者関根秀雄氏自身の感慨が重なっている。

著者は『随想録』を改めて読み返してみた。そして『随想録』第一の特徴が「個性の優位」ということと、「モワの自然流露性」であると自らに断定を下している。その枠の中で、ではモンテーニュは何を証明しようとしたのか。もし意識的にも、客観的にも、前進も後退もなく初めから終わりまでただモンテーニュがあったとするならば、400年を経た今日なお洋の東西を分かつたらずに人々に感銘と慰めを与え、そして、人間であることに対する誇りと生きる勇氣とを学びとらせて止まない『随想録』は、本書の中で関根秀雄氏が具体的に引用した章句や章節以上に、はるかに多くの要約しがたい重要な、珠玉の文章をちりばめているものと理解しなければならないであろう。

「書評」のしめくくりとして、付言することを忘れてはならないことは、本書が最後の1ページまで力強い、流れるような潑刺とした文章によって叙述されているということ、同時に随所に行き届いた配慮によって、フランス語から日本語への至難な翻訳が見事に完成されている苦心の跡が、カタカナで添えられているルビによって明瞭にされていることの2点である。これはわれわれ後進の学徒に対する何よりの温い思いやりであって永く感謝される

ものと確信する。

(完)

(白水社, 1980. 4. 25発行, 定価3,500円)

補遺 本年フランスで開かれた400周年記念行事の1つである「国際モンテーニュ学会」(Congrès International des Etudes Montaignistes)については、「日本フランス語フランス文学会」の1980年度秋季大会(福岡)において報告が行われたが、関根秀雄氏はボルドーのアカデミー(Académie Nationale des Sciences, Belles-Lettres et Arts de Bordeaux)から第1回の「モンテーニュ賞」(Prix Michel Montaigne)を受賞した。このボルドーのアカデミーはルイ14世によって1712年に公認され、創設されたもので、モンテスキューがその会長であった時期もある。